

特集 地域おこし協力隊

平成二一年度に総務省によって「地域おこし協力隊」が制度化され、今年度で六年目を迎える。

この事業は、過疎高齢化のすすむ地方自治体が、さまざまな経験を持つ都市圏の人たちを隊員として委嘱し、農林漁業の活性化や生活の応援、祭りや伝統行事の維持などの地域おこしに取り組んでもらい、その報償費と活動費を国が特別交付税措置によって支援する画期的な制度である（支援は一年以上、三年を限度）。

平成二五年度の実績では、全国の三一八自治体に九七八人の隊員がおり、うち離島では北海道利尻島から沖縄県渡名喜島にいたる約三〇市町村で八〇人以上が活躍。年齢層も、二〇歳代から六〇歳代までとじつに幅広い。

商品の開発や教育環境の改善など、あらかじめ受け入れ側が期待していた任務にあたる隊員もいれば、まず島を知ることからはじまり、そこに暮らす人びとが何を求め、そして何をすべきかに思いを

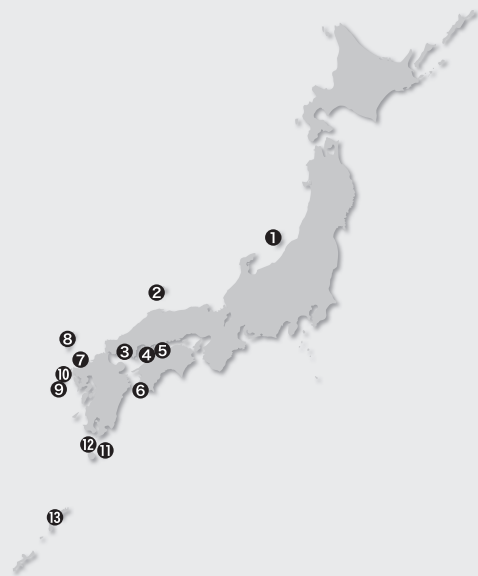
めぐらし、試行錯誤する隊員もいる。

「島のくらしを守り、島と島、人と人をつなぐ手助けをする」「地域の隠れた宝を発掘して情報を発信、付加価値をつけて商品化をはかる」――。言葉で語るのにはやさしくとも、実際の現場は、地道な活動の積み重ねなしには成り立たない。

こうした隊員たちの忍耐強い努力に触発され、みずからの暮らしぶりや共同体に対する意識が変わってきた地域もある。隊員の活動期間のみにとどまらず、その貴重な経験と島づくりへの思いが、つぎを担う新しい人たちへと引き継がれていくことこそが、この制度の要諦でもあるのだろう。

本特集では、各島での活動が仕上げの時期を迎える現役の隊員九人と、委嘱期間後も島に定住してさまざまな取り組みを続けている五人の方々に、ご自身のあゆみと成果をふりかえっていただき、受け入れ側にも島々の現状とこれからの課題について語っていただいた。





まず地域を知り、住民を巻き込む活動へ

- ① 佐渡島(新潟県佐渡市) ●木野本 信子 26

人づくりこそが、島づくりへとつながる

- ② 隠岐島前(島根県海士町・西ノ島町・知夫村) ●奥田 麻依子 30

ともに汗を流し、島の人の「やってみたい」を実現

- ③ 大津島(山口県周南市) ●大友 翔太 34

定住へ向けて島に産業をおこしたい

- ④ 関前諸島(愛媛県今治市) ●成田 晶彦/安井 紫乃 39

「あるあるメガネ」でみれば、宝の山がみえてくる

- ⑤ 上島諸島・魚島群島(愛媛県上島町) ●藤巻 光加 44

この島に生まれ育った自分にはかできない活動を

- ⑥ 鷗来島(高知県宿毛市) ●宮本 五 49

7つの島を横につないで個性を見直す

- ⑦ 玄海諸島(佐賀県唐津市) ●土谷 朋子 53

島の魅力、見つけて、活かして、繋ぎたい

- ⑧ 対馬島(長崎県対馬市) ●川口 幹子 57

超高齢化の過疎集落で地域おこしを模索する

- ⑨ 福江島(長崎県五島市) ●坂本 吉晴 62

暮らしや風土、生産者の思いを伝える落花生事業

- ⑩ 小値賀島(長崎県小値賀町) ●福川 諒 67

ショウガ栽培プロジェクトで地域力の創造を

- ⑪ 種子島(鹿児島県西之表市) ●遠藤 裕未 72

商品開発から荷役まで、多彩な活動で地域に貢献

- ⑫ 黒島(鹿児島県三島村) ●宇津野 育己 76

若い世代に「帰っておいで」と胸を張れる農業をめざして

- ⑬ 加計呂麻島(鹿児島県瀬戸内町) ●畠山 育代 80



まず地域を知り、 住民を巻き込む活動へ

佐渡島



海府マップ

木野本 信子 (きのもと のぶこ)

新潟県小千谷市出身。大学進学で上京後広告代理店などに勤務。2013年より地域おこし協力隊として佐渡市に移住。趣味はスポーツ観戦と旅行。住民から魚をいただくことも多いため手早くさばけるよう日々練習している。



鬼太鼓の提灯をもつ筆者(中央)。

◆トキのひな誕生をきっかけに隊員に応募

地域おこし協力隊として佐渡に来て一年と三ヶ月が過ぎました。

生まれはおなじ新潟県の小千谷おちやですが、大学進学で上京して就職、二五年を越える東京の暮らしにも満足し、このまま人生は過ぎていくものと思っていました。ところがトキのひな誕生のニュースをきっかけに佐渡に興味を持ち、いろいろ調べていくうちに島の奥深い魅力に惹かれ、いつか住んでみたいと思うようになったのです。そんなときに知ったのが「地域おこし協力隊」の募集でした。これも何かの縁と応募し、いまに至ります。人生どこでどうなるかわからないものだと身をもって実感しています。

私の担当する海府地区かひふは、佐渡の北部の海岸沿いに点在する九つの集落からなる漁業の盛んな地域です。内海府では二ヶ所で大型定置網漁を行っており、初夏にはマグロ、初冬には寒ブリといった高級魚が水揚げされます。外海府ではアワビやサザエ、上質な天然ワカメなどの資源に恵まれています。

農業は米作が中心。寒暖差のある気候と潮風のミネラルで良質な米を栽培しています。しかし、広々とした平野を持つ国中地域にくらべると作付面積はさほど広くありません。半農半漁で生活している人も多くいます。

観光面ではミシュランの2つ星評価を得ている景勝地の大野亀・二ツ亀や「日本の快水浴場百選」に選ばれた二ツ亀海水浴場があり、観光やレジャーを楽しむ人が多く訪れます。とくに初夏のトビシマカンゾウの群落が開花するシーズンには連日バスや車の往来が賑やかになります。

一方で海府地区は、佐渡の中でも過疎高齢化が進んでいる地域です。空き家が増え集落に活気がありません。あと一〇年もすると子どもがいなくなるかもしれないという現実があります。過疎を食い止めるために、移住やUターンの斡旋をどう進めていくのが喫緊の課題です。

◆海府マップで地域の情報を発信

協力隊の私がこの地でできること、求められていることは何だろうか？ そのヒントを得るために、まずは地域を知ることから始めました。集落をくまなく歩き、みどころを探したり住民と話をしたり、地域の行事や定例会議、集落作業にも積極的に参加しました。

最初感じたのは各集落間での交流が少ないことでした。集落間が距離的に離れていることもあり、隣の集落のことをあまり知らないという住民も多いようです。

そこで地域の情報や行事などを記した「海府だより」というかわら版を作成し、月に一度配布することにしました。大きなイベントだけでなく小さな出来事や面白い風習など

も掲載したところ、いろいろな方から「ずっとここに住んでいたけれど知らなかった」「もうちょっとくわしく教えて」と声をかけていただきました。住民の方に自分を知ってもらおうという意味でもよかったですと思います。

つぎに気になったのは、観光客のほとんどが大野亀や二ツ亀にだけ滞在し、ほかの場所は素通りすることです。海府は市街から離れており、わざわざ時間をかけてここまで来たのに、すぐ帰るのはもったいないと感じました。また地域への経済的な効果も少なく、せっかくなかたさんの人が訪れているのに何かできないものかと思案しました。

ほかの場所に立ち寄らない理由のひとつに地域の情報を知る機会が少ないことがあるとわかり、情報発信力を強化しようと思ひ立ちました。ブログやフェイスブックなどを活用して、地域情報を発信するとともに、この地域に特化した「海府マップ」を作成しました。以前、地域で作成した

地図をもとに、知られざる名所やテーマごとの観光プラン紹介など、さまざまな角度で興味を持ってもらえるよう工夫し



新潟県の北西に位置し、周囲約280km、面積約855km²(東京23区の約1.4倍)で日本最大の離島。

て島内外に配布しました。地図を作成し直し、自分自身もあらためて海府について学べたことも収穫でした。

そのほか地域のちよっとした話題や取り組みを新聞やテレビにコンスタントに取り上げてもらうよう働きかけたりもしています。

◆佐渡を代表する花と魚を地域ブランドに

こうして協力隊員としての活動を進めています。最大の課題である「過疎高齢化の食い止めと人口を増やす」策についてどうするべきか。もちろんすぐに改善できるほど簡単なことではないとわかってはいますが、活動を通して少しでも貢献したいのです。

海府にUターンやイターンが集まらない理由のひとつとして、収入源の確保が難しい現状があります。

海府は漁業が盛んですが、裏を返せばほかに主だった産業はありません。未経験者が漁業だけで食



大野亀に群落をつくるカンゾウ。

べていくことは困難です。市街地に通勤するにも距離があるため難しい。この地で新しい産業をおこす、または企業や団体を誘致することができれば人の流入も増えるでしょう。そのため海府の特色や資源、地域の利点を見出すこと、それを島内外に広く知らしめ興味を持つ人たちを増やす必要があります。

海府は市の花であるトビシマカンゾウ（以下、カンゾウ）、市の魚の寒ブリという佐渡を代表する二つのブランドを持っています。とくにカンゾウは大野亀が日本一の群生地、知名度は全国区です。しかしカンゾウを用いたグッズや観光商品はほとんどつくられていません。「大野亀のカンゾウ」の名を使えることは大きなメリットです。これを利用しない手はありません。また華やかな花の色合いは、女性をひきつける魅力があります。

そこでカンゾウを使った商品づくりに取り組むことにしました。カンゾウの花でどんなことができるのか、染色や食材になり得るのかいろいろと試しています。国定公園である大野亀のカンゾウは使用できないため、新たにカンゾウ農園をつくる計画もあります。



多くの人で賑わう海府の寒ブリ祭り。



カンゾウの保護活動。

ともリンクすることができれば相乗効果も期待できます。こうした取り組みは、住民を巻き込んで行うことが重要です。しかし、残念ながら興味を持ってもらえても具体的な活動を一緒に行ってくれる人は、さほど多くはありません。

住民に積極的に参加してもらうためにはどうしたらよいか、そもそもこの活動が地域の活性化につながるのかと悩むこともあります。活動の意図をきちんと提案する場を持ち、地域の意見を聞きながら進めていくことで、より多くの人たちが地域づくりに参画・協力できる環境を

漁業でも町おこしにつながる活動を模索中です。寒ブリやマグロなど高値で取り引きされるものはよいのですが、値のつかないものや獲れすぎて困っている魚の加工商品化、B級グルメとしての展開などを通して収益に結びつけられないか、漁師や地元のお母さん方と話をしています。また漁業体験など観光面

つくっていききたいと思います。いま、島内には一一名の隊員仲間がいます。年齢も経歴もバラバラですが、佐渡を愛する気持ち、もつと住みよい島にしたいという志は、みなおなじです。加えて、市の担当者や各団体など私たちを支援してくださる人がいます。悩みを一人で抱え込まず、周囲の協力やアドバイスを得ながら進めていきたいと思っています。早いもので任期もあと半分。ボーっとしているとあっという間に過ぎてしまいます。住民から「この地域も変わった、ちよつと元気になったね」と思っていただけのように一日を大切に活動していきます。

受け入れ側からみた隊員の活動

●島の現状

佐渡島は、野生復帰を果たした朱鷺の島、日本ではじめて能登半島とともに世界農業遺産(GIAHS:ジアス)に選ばれ、現在は「金を中心とする佐渡鉱山の遺産群」の世界遺産登録を目指しています。

平成24年度より受け入れ開始をした「地域おこし協力隊」は、現在11名の方が島内各地区で活動しています。

協力隊員の経歴・年齢はさまざまですが、全員が地域の方々と連携して多様な分野で「地域おこし」「地域の活性化」に取り組んでいます。

●隊員の活躍とこれからへ向けて

農業・環境保全分野では行政・生産者とともに「農産物の販路開拓」「棚田の保全・維持」「果樹農園の維持」への取り組みと併せて「朱鷺の餌場となるピオトープづくり」に取り組み、一定の成果も上がっています。

観光分野では、効率的・効果的な観光・地域情報の発信とともに、地域の方々と協力して修学旅行生の受け入れ態勢の整備を行っています。

伝統芸能・重要伝統的建物群の活用や、特産品開発などにも積極的に取り組み、成果を上げています。また、業務以外にも地域社会にとけこみ、郷土芸能の伝承や地域おこし活動に積極的に関わること、地域の一員として充実した生活を送っています。

協力隊員の方々には、活動を通じた地域活性化のさらなる推進と併せ、さまざまな体験を通して成長されることを期待しています。今後も、積極的に「地域おこし協力隊」事業を活用していききたいと考えています。

(新潟県佐渡市地域振興課 北嶋裕行)